



TITLE:

アビシニア國王に謁するの記(四)

AUTHOR(S):

小牧, 實繁

CITATION:

小牧, 實繁. アビシニア國王に謁するの記(四). 地球 1932, 17(3): 225-237

ISSUE DATE:

1932-03-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/184015>

RIGHT:

アビシニア國王に謁するの記 (四)

小 牧 實 繁

二時二十五分 ウーランケテ(Ulanketi)驛着。此の驛に着く前に見たものがある。其れは雲霞即ち浮塵子の群である。初め車窓から窓外の風物を眺めて居た私の眼に遠方に煙の様なものが上るのが氣着かれた。山火事の煙でないかと思つた。段々汽車が進むにつれて煙は益々強く、濛々と動くのである。黒褐色の氣味悪い煙が、どうも山火事では無さ相だ、龍卷の捲き上げた黄塵ではないかと思はれた。益々近づくと左様でも無いらしい。太陽はその爲めに暗くなつた。よく見れば煙を構成する粒子が自體運動をやつて居る。そして其れは正しく雲霞であつたのである。話しには聞いた事がある。然しそれは支那文學者の誇張であるとのみ思つて居たのであつたが、雲霞は正しく眼前に實在するで

はないか。今や汽車は雲霞の群中に突入したのである。其して可なり速度の遅い汽車ではあるが兎に角汽車が十分間走り續けて尙此の煙の中から出ないのである。實在の浮塵子が如何に大きな群團をなすかを知るのである。中空高くより地表まで、幅少なくとも數軒の群團をなして居ることは明かである。其して地表には線路の上にも草原の上にも無數の雲霞が休息し又草を食むものも多い。列車にとまるものもある。手に取つて見るとそれは方言齋斯グザの類で、灰色がかつた褐色の氣味悪い虫である。天を仰げは恰も大粒の灰色の雪が降つて来る様である。私は古い説話とのみ考へて居たものを今や現實の世界に見たのである。斯くして私には誠に興味深い事實であつたが、此の蟲は朴訥なアビシニア

農務大臣の頭を少なからず惱ませるものであること勿論で、日本に於けるその驅除法などに就いて聞かれて閉口した。

動物としては尙大きな龜がのそ／＼と歩いて居るのが車窓からも時々見られ、又鳥では所謂 helmet-fowl なる野生の禽類が可なり多く認められる。背中の恰好が丁度ヘルメット帽の形をして居るのである。雉に似て居るとも云へる。

作物としては小麥と大麥とが多く認められ、又植物では柘榴の木がある。此の邊の植物景觀は日本の或る地方のそれと大差ない様にも思はれる。

三時三十分 ボルチョッタ(Borchotta)驛着。此所の熔岩臺地は、往路にも見た如く、末端垂直で、到底も明瞭である。そして其處を切つて瀧が落ちて居る。

よく繪端書などに見る様な髪飾りをした女を見る。又家畜としては羊を見る。

四時 マルカジロ(Malkadjilo)驛着。此所の火山岩層は丁度人工の城壁でも見るかの如く表

面は水平に側面は垂直の崖をなして聳えて居る。そして河の沿岸は周圍の土地より幾分水分に富む精かアカシア以外の別種の植物を有し、特殊の植物景觀を呈して居るのが明瞭に看取せられる。

マルカジロ驛を出て、汽車が約一時間走る間は全くそれ自體が火山學の實驗室であると云へる。大小幾多の火口あり、圓錐あり、熔岩流あり、鹹湖あり、殆んど迎送に暇ないのである。寫眞(第二十五圖、第二十六圖)を撮つたが失敗であつた。

第五廿第圖



五時十五分 メタハラ(Metahara)驛着。マルカジロ、メタハラ間も立派な火山學の

第廿六圖



ちに下車して線路の附近にまで流れ出して居る熔岩流から一箇の岩石標本を採集することを得た。標本欲しさの一念が此の一列車を火山性曠野の中に驛間停車せしめたのであらうか。そして恐らく此の岩石標本はアビシニア國から日本

實驗室である火山學者が研究したならば面白いだらうと思つて居ると不完全な汽車が停車した。故障ならば困つた事だと思ひながらも幸運來れりと直感し直

人の手によつて日本に賣された唯一のものであるかも知れない。

メタハラの女はアデス・アベバの女とは著しく異つた服装をして居る。即ちアデス・アベバに於いては婦人は多くは白の衣服を纏つて居るのに對して此所メタハラに於いては婦人は大部分色物を着て居る。色は黒又は赤の原色で、而も模様を有して居る。そして頸には古拙ながら頸飾りを帯びて居るのである。兩者の間に人種的の相異が存する事は體構や容貌の方からも解る。而して風俗として興味あることは此所の女は背中に子供を負うて居ることである。

アデス・アベバから同乗した二人の獨逸人が此の驛で下車した。彼等は寫眞機の外に携帶用のボートや橈や天幕などを用意して居る。恐らく此の火山地方の湖水、多くは鹹湖であるが此等の湖沼を調査する湖沼學者でもあらう。商人で無いことだけは明かであるが、或はアビシニアで働く知識階級の人であるかも知れない何れにしても獨逸人の學的探究心の旺盛なものには感

服の外無い。彼等を此の驛に迎へた一人の紳士は功みに佛蘭西語を語るが、着色寫眞等を出して見せて居る。彼は自然科學者なのかも知れないと思ふ。

七時過アウアシ^ユ着。七時半夕食、九時就寢。大分高原を降つた精もあらう、アヂス・アベバとは雲泥の差の暑さで、水銀柱は攝氏二八度まで上つて居る。

八月二十八日 水曜日。五時十五分起床、五時四十五分朝食。汽車は六時半發との事であつたので其の時間に乘込んだが、實際は七時にしか出ない。

八時十分 アルバ(Alba)驛着。アウアシ^ユ驛を出て間もなくアウアシ^ユ河鐵橋を通過する。此の川は可なり深い峽谷をなし嵌入河川の地形を呈して居り舊氾濫原は砂礫層よりなるが、此の河成堆積層が基盤の火山岩上に乘つて居る斷面が認められる。其の沖積平原は極めて平かで所々ネックの存在を見る。植物では殊にアカシヤの多いのが目に着く。

九時十分 コラ(Khora)驛着。土人の携へる投槍(Jagge)を見ると第二十七圖に見る形をして

圖七廿第



居る。この投槍が中々恐ろしい武器なのである。

土人のバナナを賣るものがある。丁度琉球産のバナナ位の大きさで、普通果物店で賣られて居る様な大きなものではなく、一見甚だ不味相であるが、そんなに輕蔑したものでもない。

婦人が民家の外庭で臼と杵とで粉を搗いて居るのが見える。一種の異形の臼と杵とである。

十時四十五分 メヘン(Meheso)驛着。

此の附近には四角形の家屋が多い。土人は草製の編籠に特有のパンを容れて賣りに来る。勿論外國人は買はぬが車中の土人が買ふことがあるものらしい。此の草製の編籠は着色された幾何學的模様を有し蓋付である。又瓢箪若しくは蠟引した編籠に牛乳を容れて賣りに来るものがある。異國に瓢箪を見て却つて珍らしく思はれた

此の邊の男子の服裝は又たアデス・アベバのそれとは異つて居る。彼等はアデス・アベバの男子の如くズボン(肉に着く程の細いズボン)を穿かないのである。一つは氣候の相違にもよるであらう。

十一時二十分　ムールー(Moulou)驛着。此の驛には將に輸出せらるべき多くの獸皮の荷造せられたものを見る。

十二時三十分　アフデム(Afdem)驛着。エハーに中食、一時半出發。

二時　ビケット驛(Bicket)、三時　ゴータ(Gotla)驛着。此所からデレ・ダウア迄の土人は中々立派な容貌をして居る。若し容貌の點のみから云へば彼等はアビシニア人よりも優れて居ると云へやう。殊に足まで引摺る様な長い着物を着流した女は非常に瘠せ形ではあるがそれだけエレガントであることを否む事が出来ない。玉蜀黍の焼いたのを賣る者が多い。日本の田舎の夏の風景である。

七時　デレ・ダウア(Dire-Daoua)着。伊太利

アビシニア國王に謁するの記

館に入り八時夕食、十時就寝。

今日道中に觀察した所を更に補ひ記すならば往路徒歩連絡した箇所の鐵橋の破壊は未だに修繕せられて居ず、アビシニアの活力が如何に薄弱であるかを物語つて居たし、沿線各驛に於いて幼い娘達や童子が食物や金錢をねだるのは如何にも哀れを感じしめ現實に土人の窮迫を物語つて居た。彼等は殆んど骨と皮とに瘠せて居てその榮養情態の善くないのを示して居た。尤も容貌は決して悪くない。皮膚も全く黒色ではなく唇は薄く、眼は到底も涼しい目で魅力がある。彼等がアビシニア人でない證據には鼻稜に一條兩頬に各二條の刻線が施されて居るので解る。回教を奉ずるソマリかガラであらうが、恐らくソマリでなくガラであらう。

今日又金狼(Chacal)が原野の中を走るのを見た。生れて初めて見た動物界の姿である。

八月二十九日　木曜日。六時十分前起床。顔を洗つて先づ秀坊の寫眞に見入る。今日が彼の第三回の誕生日なのである。一昨年の誕生日は

ナイヤガラ瀑布で迎へた、去年の誕生日は佛蘭西中央高原中の一寒村サン・プリヴァで迎へたが今日此の子の誕生日をアビシニアの一寒村デレダウツに迎へ様とは夢にも想はなかつた。何かの因縁ではあるが、一種異様の感慨なきにしもあらず軽い昂奮を覚えるのである。

六時半朝食。支拂を済ませ、六時四十五分宿を出て驛に至る。七時汽車はデレ・ダウアを去る。驛の税關吏は許可なき象牙の移出には税を支拂はなければならぬと云ふ。然しこの事情を話して無税で出ることを得た。

八時 エル・バー(El Bah)驛着。デレ・ダウアを去つて汽車が高原を降り初める頃から我等は窓外の植物景觀が急に貧弱になるのに氣着かざるを得ぬ。仙人掌、アカシア、及び一種の蔦が卓越する様になる。

デブチで求めた投槍の如き小形の投槍を實際に携へて居るものがある。左すればあれは外國人に御土産として賣る爲めに小さく美しく製作したものでもないものである。

九時 ハッラウア驛(Harraoua)着。此の邊には多數の羊の群を見る。寫眞を撮つたが失敗であつた。

此の附近の家屋は平面が四角形で、木材の骨組に、壁下を樹枝で作り其の上に砂土の壁を塗り、屋根は扁平で砂土で固めて居る。雨の少ないことが此の家屋の構造からも察せられるのである。(第二十八圖參照)

圖 八 廿



九時四十分 メロ驛(Melol)、十二時 ラッサラート(Lassarat)驛着。ラッサラート驛の手前には石造の家屋が多い。之れは木造の家を

建てようにも樹木が殆んど無いからである。又車窓からは遙か遠くに多くの小規模ながらの蜃氣樓が眺められた。丁度潮水か沼かでもあり其の對岸に樹立でもあるかの様に見える。又屢々

龍卷が砂を捲き上げて居るのが遠望された。高原も此處まで降ると、日本の否アビシニア的でなくなり如何にも沙漠的色彩が濃厚になる。そして地物としてはネックが非常に多く、動物では屢々ガゼール(羚羊)が徘徊するのが認められる。更に興味ある景觀は丘陵の麓若しくは斜面の上に遊牧者のキャンプ用の環形の石垣が點々して窓外に認められることである。然しながら今は荒漠たる黒褐色の石原を行くのである。

十二時二十分 アイチャ(Aicha)驛着。中食一時二十分出發、一時四十分 アデ(Adèle)驛着此の邊には殆んど樹木は無いと云つてよう、唯僅かの草が存在するのみであり、其處には草を求めて多くの羚羊が徘徊して居る。

二時二十分 ダウエン(Deuvenle)驛着。此の附近には水成岩層中に無數の風蝕痕を見るのみならず又た日中及夜中氣溫較差による岩石破壊の情態がよく認められる。風蝕痕は一見しては海蝕痕の様に見えるが海水は勿論何處にも存在しないのである。砂と風の威力も中々悔り難

いのを思はせる。

三時 アリ・サビエット(Ali-Sabiet)驛着。此の村の境に一種の筵ヤシ又は薦トセで作つた半永久的のキャンプが認められる。此の邊には殆んど全く樹木を見ないのであるが、牧草が発見せられるのでこれを追つて牧畜が行はれるらしく家畜群の徘徊を見るが、之れを追ふ男の子は頸に硝子玉の頸飾を下げて居る。女の子は頸には硝子の頸

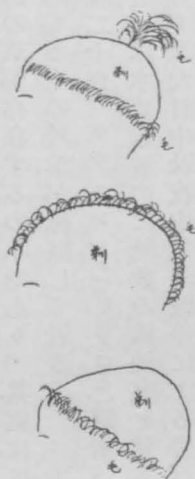
第 廿 九 圖



飾を着け、銀又は硝子の腕輪をはめ脚の先即ちクルブ蹠ソールの上の所に足飾を帯び

て居るのが珍らしく眺められる。(第二十九圖)
容貌も悪くはない。唯頭髮の剃り方が變つて居

第卅圖



第卅一圖



て一寸
滑稽で
ある。

大體第
三十圖
に見る

様な三
種の剃

り方が
ある様

である

である

である

である

である

第三十一圖は變に頭髮を剃られた三人の子供を示す。
婦人は幅廣の布で子供を背に負ひ若しくは片脇に抱へて居る。彼等は頭髮を結つて之れを一種の網で覆つて居る。
三時四十分 ダスビウ(Dashiou)驛着。此所の家屋は石を積んで壁で詰め屋根には土を載せて居る。建築材として木材がなく、雨が少くて泥の屋根でも支障ない事を物語つて居る。形は四角である。(第四圖參照)

四時十五分 ホル・ホル(Hol-Hol)驛着。ホル

ホルの鐵橋から下瞰するのにホル・ホル河は大分深く下刻嵌入せられ、基盤の岩石は矢張火成岩らしいが、高原に見た火山岩よりは時代の古いものらしく思はれる。遊牧民のキャンプ用に積み上げた環形の石垣は此の邊の石原にも無數に認められ、若し此れを飛行機からでも瞰下したならば或は火山の火口かと見まがふことであらう。

五時十五分 チベツン(Chebele)驛着。ホル・

ホル驛からチベレ驛までの間に刺あるアカシア樹が認められる。此の邊の河川は矢張嵌入せられて居る。水は少しも無く涸川であるが洪水の時は相當出水するのであらう。そうでなければ此の川の地形が説明し難くなる。總じて此の邊は大變乾燥して居り、植物は殆んど絶無で唯一帶の火山岩の石原である。勿論實際に暑いのであるが、木が無い爲に一層暑い感じがする。日射は強く殆んど堪へ切れない思ひがするが、乾燥して居る精か、汗は比較的出ないのである。此のホル・ホルの驛の附近に土人のキャンプがあり、その土人の或るものは矢張り投槍を持つて居る。一人の子供が野生の鳩を賣りに來た。日本の鳩より遙かに小さい。デブチでは此を飼つて置いて時々料理に使ふのである。

早やデブチの町が白く光つて遙か低地の彼方に見える。遠く望めば、殊にアビシニアを見て來た眼を以て見れば、誠に類ひない美觀の都市とも眺められ、日本通ひの船の寄る所と思へば特に懐しい都會とも眺められるのである。

六時十五分前デブチ驛着、六時旅館に歸る。主人が自動車で迎へに來て呉れた。先づ一杯のリモナードに渴を醫し、一風呂浴びた後着物を着替へて先づやれ／＼と思ふ。七時半夕食、食後暫らく散歩、九時宿に歸り荷物を片附けて九時過就寢。

八月三十日 金曜日。六時半起床、七時過朝食。食後久方振りに「フオッシュ元帥に聴く」を讀む。八時半印度支那銀行に至り、アビシニア貨幣の持残りを佛蘭西貨幣に換へる。九時半徒步佛蘭西郵船會社支店に至り乗船券の査證を求める。皆んな白人等がヘルメット帽を被る所を帽子なしで出掛けただから無謀である。實際無帽は無謀であつた。到々堪えられなくなつて洋服の上着を脱いで頭から被つたのであるが矢張り暑い。白人が庇の長い、廣い廻廊の着いた、なるべく光線を避ける家構に苦心して居る理由がよく解かる。

今日は特に暑い。朝からリモナードの飲み通しである。のみなが十一時半まで休息する。

十一時半中食。食後「フオッシュ元帥」を読む。四時から一時間半ばかり寝る。晝寝はどうしても必要の様だ。

覺めてテラスの上に宿のマダム、一白耳義紳士等と相語る。此の紳士は美術研究家で嘗て支那及日本を訪れたことがあると云ひ日本最負である。

七時半夕食。暑い割に食の進むのは如何したことだらうか。恐らく氣候が乾燥して居て蒸暑くない爲消化器の作用は活潑な爲でもあらうか。食後テラスで休息し九時半室に歸り讀書を續け十二時就寝。

八月三十一日 土曜日。八時半起床、九時朝食。食後「フオッシュ元帥」を読み、正午中食。食後讀み續け、四時より五時半まで晝寝。出でて町を散歩、繪端書を求め、又た土人の店に至りアラビヤ帽子を購ひ、更にアラビヤ人の店に至りアビシニア製草籠を求め七時半宿に歸る。

七時半夕食。食後町を散歩しソマリ土人の子供等と話す。彼等デブチ在住の者は多少の佛蘭

西語を解するのである。然しながら彼等はアチス・アベバのアビシニア人の如く「何でも仕事はするから日本へ伴れて呉れ」などとは言はなかつた。勿論青年になつたならばそれ位の事を言ふ様になるのかも知れぬが、未だ日本へ連れて行けと云ふ程度にまでは知識が進歩して居ないのであらう。

九時半宿に歸り「フオッシュ元帥」を読み、十一時半就寝。

九月一日 日曜日。九時半起床。朝食後昨日及一作日の日記を誌し十一時半に至る。

× × × ×

私の歐米遊歴の日記はこれで切斷されて居て九月一日午前十一時半以後の消息は自分でも今判然と思ひ出すことは出来ないが、其の翌日九月二日故國に向つてデブチを出帆したことは、當時私が郷里に送つた端書によつても明かである。

「一昨々日當地に歸着、マラリアにもかから

ず大して疲れもせずマルセーユからの船の來着を待つて居ます、全くの獨りぼつちですが慣れては大して淋しさも感ぜず昨日はアラビア人の店や土人の店などをひやかして草製のバスケット、アラビア帽等を買ひました、明日は愈々船が着き即日東に向ふ筈です、皆様へよろしく、御大事に、秀坊の御誕生何の催しもなく祝ひましたが、アフリカの一角で祝つたと云ふ丈けでも後年の思出になると思ひます、九月一日於チチ

然らば問題のチチン嬢は如何なつたのか。思ひ起す、九月一日夕刻チチンの汽車でモンフレード夫人が降つて來るとの事で宿の主人等と夕方停車場に迎へに行つたのを。夫人はチチンの妹なる末娘と可なり多くの荷物を携へてデレダウアから降つて來たのである。そして互に久方振りの再會を喜び妹と三人夕食の卓に就いたのである。然しながらチチンは終に此の席に居合す事を得なかつた。彼女は其の父モンフレードと亞米利加の或る女流新聞記者を案内してチチンの對岸オボックの海に遊んで居たのである

モンフレード夫人との對話は極めて興味あるものであつた。彼女は先づアビシニアに於ける一洞窟の發掘に就いて語り、特にムステリアン期石器と同型式の石器と共に土器を發見した事實を語り、私は國王謁見の顛末を語つて相喜び最後に雜誌 *L' Anthropologie* を通じて互に日本及び佛蘭西の人類學考古學に就いて知り合ふ以外に時々學界の事情を通信し合ふべきことを約し相別れたのであつた。

娘は姉チチンと同じ茶目式の顔つきで殊に其の青色の眼が可愛ゆくてならず、日本より持參の博多の錢入れを與へたことである。

食後最後の散歩をなし、尙木製ソマリ土人の牛乳容れ、木製枕、櫛、バスケット等を求めて宿に歸り荷物の整理をすると、夫人は夫人で發掘品を容れた幾つかの荷物に博物館公用の貼紙を貼付したり中々忙しいらしい。

九月二日は明けた。バルコニーから海を見ると「ゼネラル・メッサンゼー」丸は既に港に入つて居る。我れを故國に運ぶべき便船と思へば未

だ乗らぬ先きから既に懐しい親船の親しみを覺える。あの船に乗るんだと思ふ丈で早くも胸は躍る。

あはただしく準備を整へ、朝食も六々攝らず急ぎ宿の支拂を濟ませ、モンフレード夫人に最後の別辭を述べ、宿の人々にも別れを告げ、主人の運轉する自動車で港まで運ばれる。そしてアラビヤ人のガルソンが發動船で親船まで私を送ることとなつたのである。

その時一大恐慌が起つた。貧弱な老朽發動機はどうしても發火しない。如何程衝動を與へても發火せぬ。運轉士は甚だ頼り無い土人である時さへ來れば親船は我れを見棄てて出帆せぬと限らない。

自分は決心した。土人に橈を取らせて小舟を親船まで漕がせようと。發動船では中々それを承知しないのであつたが、ガルソンを叱責して漸く我が意に従はしめ、親船の出帆に間に合ふ様漕ぎ着ければ賞を與へる約束で漸く親船に迫り着くことを得た。荷物も積み乗船券を事務長

に示し、豫約の一等室に落着いたので「ゼネラル・メッサンゼー」は漸く出帆の用意にかかつた。其の時である。未だ親船の下に居た小舟の中でアラビヤ人のガルソンがけたたましく叫んだ「ムッシュー、コマキ、マドモアゼル・ジズエルが歸つて來た、船の舳先へ出て御覽なさい！」

自分は急ぎ舳先へ出て見た。と一艘の帆船前船が「メッサンゼー」目がけて走つて來る。段々近くなる。其處には三人の人物を認めることが出来る。一人の男子と二人の女子と。一人の女は眞赤な運動着を被て居る。よく見るとそれはチン嬢ではないか。一人の男は彼女の父モンフレードであらう、一人の女は女記者であらう。聲を掛けて手を振るが、帆船前船の答へはない。氣が着かぬらしい。やがて帆船前船は「メッサンゼー」の左舷と少しの間隔を置いてかすめる様に走去らんとする位置まで來た。ベレーを取つて合圖をするが、チチンはそれに氣が着かぬらしい。不動のままで大船を見て居る。相知らずして別れるのかと思ふ瞬間、やつと彼女の眼中に自

分の姿が入つたらしい。彼女はばたばたと身動きた。赤い羽の小鳥が羽ばたきでもするかの様に。眩しい熱帯の晝頃の太陽の下で赤い羽の小鳥は何か強い衝動をでも受けたかの如くばた／＼と鳥籠ならぬ小船の中で羽ばたきしたのである。自分は静かに之を見守つた。そして帆前船がデブチの陸に着いたと思はれる頃から間もなく「ゼネラル・メッサンゼー」は静かに錨を捲いてデブチの港を出たのである。(完)

(一九三一・六・二五稿)

新著紹介

○陸地測量部發行地圖目錄

昭和六年九月現在

陸地測量部發行 定價貳拾九錢

元陸地測量部班長 五藤饒男著

○地圖の讀み方

陸地測量部部長 石井英橋校閱

發行所 川流堂 定價貳拾五錢

右の二冊は定價の示す如く、如何にも小冊子ではあるが單に地學研究者のみに止らず、一般人いやしくも陸地測量部の地圖を利用する者は誰も持合せたきものと思ひ紹介す。

新著紹介

前者は目錄ではあるが地圖購入の場合最新發行年月の物を知る上に重要な役目をして呉れる。修正測量前の地圖は勿論特殊な比較(同一地)をなす場合の他は地方の書籍店で知らずに買はされる事がある。又此の小冊子は正六年制定地形圖圖式が挿入してある故、地圖の欄外にも無き記號を知る事が出来る。

後者は測量實行者が地形圖利用者への説明で圖式説明を述べてある。地形圖の投影は何を用ひてあるか、實際の面積、方位、海岸線は何を基に探りしか等、字の大きさに依つて山脈の長さ、居住地の人口、建物の廣さ、公園の如き諸地物の廣さ等々の大略を知る事を説明してある。今少し軍隊式に徹底した説明がほしいがパンフレットの紙數止むを得まい。兎に角此の二冊子が地形圖の傍に在れば普通の實地踏査以上の効果あげ得ないでもない。(副島)

○世界地理精義

上卷 仲原善忠著

文化書房發行 定價五圓

地文現象に偏した世界地誌が正鵠を缺くならば人文現象に偏した地誌も同じ。小川博士が地理の人類活動を演劇に例へて人物を舞臺とし、兩者相待つて人類活動を研究すべきであると説かれた。此の見解を忠實に守り、人類活動の歴史的地誌をよく從來の地誌的記述と結び付け、それが旅行觀察を經に入れて繰り出されてゐる。英雄の歴史、強國の地誌の誹から避けやうと努力してある。新しき地誌開拓を衷心から喜ぶ。